

「物性研究」の思い出

氷上 忍

基礎物理学研究所の助手に採用されると、唯一の仕事が物性研究の編集長をすることである。編集長といっても、月一回の編集会議をとりまとめる仕事でどうといったこともなかった。当時は昭和堂印刷所をお願いして印刷していただいたように思う。載せる原稿の投稿がひとつでも届くと、ほっとしたものだ。京都に7年居て東京に移ったが、編集長をしていたという責任感か、あまりうまく編集をできなかったという負い目からか、東京に移った研究室でずっと「物性研究」を取り続けてきた。ついに「物性研究」が終わりになるということで、ちょうど私の東京での研究室も終わることと重なり、感慨が深い。

編集長をしていた時、物理はもうやることが無く終わりだという意見があつて、では「物性研究」でなにをやったら良いか。そんな雰囲気、編集会議で雑談していた。当時は量子ホール効果がようやく見つかったころであった。その後のメゾスコピック、ナノテクノロジー、高温超伝導、原子のボーズ凝縮、グラフェン、生物への応用の発展はだれも予想しなかった。今は物理でやることはいっぱいあつて、物性研究のテーマも山ほどあると思えるのに、終わりになるというのはやはり寂しいことである。